

平成 27 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

教育力・組織力・企画力を構成要素とする「学校力」のさらなる向上を図ることにより、生徒一人ひとりの個性・能力を最大限に伸ばすとともに、自ら目標を定め、その実現に向けて全力で努力する生徒を育てる。

1. 学習指導・進路保障体制の一層の充実により、「生徒を伸ばし、伸びいく学校」をめざす
2. 主体的・自律的な努力を怠らず、自己の向上に努める生徒を育成する、「活気がみなぎり、かつ規律ある学校」をめざす
3. 自己表現力、コミュニケーション能力を育て、国際社会で活躍する人材を育成する、「グローバルに考え、行動する学校」をめざす

2 中期的目標

【次なる50年に向かって颯爽と】

→ 平成24年に50周年を迎えたことを踏まえ、これまでの伝統の継承・さらなる発展と、より多くの「颯爽」たる若者（枚方高校校歌の一節「颯爽たり 枚方」に因む）を育てていくことへの決意を込めて、これを合言葉としたい。

1. 「生徒を伸ばし、伸びいく学校」の実現に向けて

- (1) 生徒一人ひとりが、自己実現を果たしていくために必要な「確かな学力」を身に付けることができるよう、全教員の「授業力向上」に取り組む。
 - ・ 教員相互の授業見学や他校における実践の視察など、「他から学ぶ機会」の充実。
 - ・ ICTの積極的活用の推進等、「今後における新しい授業のあり方」についての研究チームを立ち上げ、2年後には複数教科で本格的に実践を開始するとともに、学校全体の取組みに発展。この取組み等により、学校教育自己診断（以下「自己診断」という。）における「教え方に工夫している先生が多い」の肯定率を3年後に75%以上に（平成26年度は「わからない」を母数から除いた肯定率（以下同様とする。）は約59%）。
 - ・ 授業アンケートにおける満足度を3年後に3.10以上に（アンケートの「問8 授業内容に興味・関心を持つことができた」及び「問9 知識・技能が身に付いた」についての全教員の評価平均（4点満点）、平成26年度12月調査では3.05）。
- (2) 夢と志を持つ生徒の育成を図るとともに進路保障体制をさらに充実させる。
 - ・ 生徒支援体制を一層充実させ、自己診断における「悩みや相談に応じてくれる先生がいる。」の肯定率を3年後に75%以上に（平成26年度は約60%）
 - ・ 3年間を見通した本校独自の『キャリア教育計画＝「次の次の自分」を見つける』を策定し、充実させる。
 - ・ 最後まであきらめずにチャレンジする生徒を育てることにより、進学実績を向上させ、3年後には現役生の国公立大学合格者を10名以上に（H26年度3名）。

2. 「活気がみなぎり、かつ規律ある学校」の実現に向けて

- (1) 学校行事の充実、部活動の活性化を図る。
 - ・ 学校行事については、生徒の主体的な取組みを一層支援し、自己診断における「文化祭・体育祭・修学旅行は、意義深いものになるよう工夫されている」の肯定率について、90%以上を維持（平成26年度は約90%）。
 - ・ 部活動加入率について、2年後には80%以上を達成するとともに、一層の増加をめざす（平成26年度は5月調査で約75%）
- (2) 生活規律を確立させる取組みを充実させる。
 - ・ 遅刻者数について、次年度には年間1,000未満を達成するとともに、一層の減少に向けて、指導を継続していく。
 - ・ 制服の着こなし等、身だしなみに関する指導の充実、自転車の乗車マナーを含めた交通安全指導の充実を図る。

3. 「グローバルに考え、行動する学校」の実現に向けて

- (1) 授業だけでなく、教育活動の様々な場面において、「使える英語力」の伸長を図る。
 - ・ 大学等の協力を得て、「イングリッシュキャンプ」等の取組みを継続的に実施できる環境を整備する。
 - ・ 英語検定、TOEIC等の受検を推奨するとともに、それに向けた準備講習等を計画的に実施するなどして、本校在学中に英検2級に合格する生徒の数を3年後には1.2倍に（平成26年度卒業生は、17人）
- (2) ユネスコ・スクールとしての取組みを更に充実させるとともに、国際交流・異文化理解教育の活性化を図り、世界規模で考え、行動できる人材を育成する。
 - ・ ユネスコ・スクールとしての取組みについては、テーマに応じて生徒会執行部や複数のクラブが主体的に関わっている活動となるよう、推進していく。

4. 教員組織体制の強化と教育環境のさらなる整備

- (1) 学校トータルとしての広報活動を立案・実施する機関を分掌業務に位置づける。
 - ・ 次年度より文化国際部に渉外・広報に関する業務を位置づけ、中学校訪問・学校説明会等における取組内容のさらなる改善、学校HPの計画的な更新等を企画、実施する。
 - ・ 平成28年度選抜における高校入試制度の改正の趣旨を踏まえ、学校案内パンフレット等の改善を図る。
- (2) 教育環境の整備とエコ対策の強化を図る。
 - ・ 次年度より、短焦点プロジェクターやタブレットPCの活用についての研究チームを立ち上げ、校内研修を実施するとともに、ワイファイ環境を含め、次世代のスタンダードとなる教育施設・設備を可能な限り早期に導入できるよう、あらゆる方策について検討を進める。
 - ・ ペーパーレス環境の推進に向けて、校内における各会議のあり方を見直すとともに、「スクールドライブ」の活用を充実させていく。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 28 年 1 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>* 「◎」「○」「－」「△」は、数値またはその変化に対する学校の評価</p> <p>1. 概況 (昨年度から改善した項目数)</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒…51 項目中 46 (90%) 保護者…43 項目中 23 (53%) 教員…53 項目中 41 (77%) <p>2. 学校 (または組織) に対する意識 (肯定率(%) H26 → H27 以下同じ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒 (学校に行くのが楽しい) 84.3 → 84.2 (－) 保護者 (子どもは学校へ行くのを楽しみに) 89.1 → 89.7 (○) 教員 (教育活動について日常的に話し合い) 71.4 → 84.6 (◎) <p>※ 教員の意識が変化。組織力の向上につなげていけるよう、様々な教育課題の共有、改善に向けた議論などを一層活発化していく。</p> <p>3. 学習指導等</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒 (わかりやすく楽しい授業が多い) 56.4 → 63.8 (○) 〃 (プロジェクター等の活用) 75.0 → 86.9 (◎) 〃 (実験・観察・実習・校外活動等の機会) 33.3 → 39.3 (△) 保護者 (授業がわかりやすく楽しいと聞く) 60.3 → 64.2 (○) 教員 (教育活動全般を評価し次年度に活用) 66.7 → 74.4 (○) <p>※ ICT機器の活用等で、生徒の興味・関心を高める授業が増えたこと等により、数値としては改善傾向。一方で、教室外での活動については、教育効果の検証を改めて行い、今後の教育活動に生かしていく。</p> <p>4. 生活指導等</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒 (学校は生活規律等の確立に注力) 81.5 → 86.7 (○) 〃 (先生ははじめについて真剣に対応) 67.9 → 71.9 (△) 保護者 (生徒会活動は活発であると聞く) 61.6 → 52.1 (△) 教員 (カウンセリング・マインドを取り入れ指導) 76.2 → 82.1 (○) 〃 (問題行動に組織的に対応) 76.2 → 92.1 (◎) 〃 (生徒指導において家庭と連携) 95.2 → 71.8 (△) <p>※ 生徒・教員の意識からは、校内の指導体制が一定以上整っていると思われるが、保護者との連携という点では、必要な情報の発信というところから改善する必要あり。また、いじめ対応に関する数値は改善しているが 100%には至っていないことから、不安を感じている生徒が存在するという点を重く受け止める。</p> <p>5. 地域連携・広報等</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者 (学校は教育情報の提供に努力) 84.4 → 85.5 (－) 〃 (ホームページは役立っている) 61.1 → 68.3 (○) 〃 (学校行事や授業参観に参加した) — → 82.5 (○) 教員 (保護者・地域等への情報周知に努力) 95.2 → 84.6 (△) 〃 (支援学校等と連携し教育活動に生かす) 57.1 → 89.7 (◎) <p>※ 他校種との交流などを含め、地域連携を推進することにより、本校の教育力の向上につなげていきたい。</p>	<p>* 委員構成 6 名 (大学教授、会社役員、中学校長、小学校長、保育所長、PTA 会長)</p> <p>○ 第 1 回 (6/29) 「H27 年度学校経営計画について」</p> <ul style="list-style-type: none"> 組織がしっかりする原則は、「挨拶・清掃・時間厳守」。学校の指導においてもこの基本が重要。 教員相互の授業公開の推進により、教員間の話題が「教科論」から「授業論」に変化。一層の推進を。 国立公立大学に進学する生徒は、最後まであきらめずに頑張りきれた生徒。そのような生徒を増やすことで、生徒・保護者の期待に応える学校として、枚方高校の評価は一層高まるはず。 留学体験が人を変える。自己主張しないと何も始まらないことや、親や友達のありがたさを留学体験の中で学んでくる。枚方高校における教育プログラムとして一層推進することを期待。 <p>○ 第 2 回 (11/11) 「H26 の取組みについての中間報告」</p> <ul style="list-style-type: none"> ICT機器を活用し、板書等余分な時間を効率化することで、生徒の学習意欲を高めていける。一層の推進を。 近ごろ「学ぶ力」が弱いと感じる若者が多い。与えられた課題をやり遂げる力を身につけるには、学校での学習だけでなく、家庭学習も重要。 大切なのは切り替えと集中。家庭学習の時間を確保しつつ、部活動を通じて人とつながる力をしっかりと養ってほしい。 <p>○ 第 3 回 (2/29) 「H27 年度学校評価について」</p> <ul style="list-style-type: none"> 企業の立場からすると、毎日遅刻して出勤してくるような社員は困る。遅刻防止について、本校の取組みが一定の成果をあげていることは評価。 「紙漉き」や「藍染め」などを海外の留学生に体験してもらったとのことだが、国際教養科を持つ本校にふさわしい取組み。国際交流に関するメニューをさらに充実させ、本校の特色としていっそう発信していくべき。 自国の文化を尊重する気持ちを持ってこそ、他国の文化を尊重できる。国際交流の取組みの中で、日本の文化を積極的に発信していくことは重要。 本校では「学校教育自己診断」等のアンケートをうまく分析・活用し、取組みの「成果」と「課題」を明確にする努力がされていると考える。このような姿勢を持ち続けることが大切。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 「生徒を伸ばし、伸びいく学校」の実現	(1) 全教員の授業力向上	<p>ア 授業アンケートの結果について、全教員が真摯に受け止めたうえで、それぞれが改善に向けて取り組む。(各教科単位等による分析も推進)</p> <p>イ 教員相互の授業見学や他校等の先進的な実践を視察する機会を増やす。加えて、短焦点プロジェクターや書画カメラの導入・活用等、授業のあり方についての研究を推進。</p>	<p>ア 授業アンケートにおける評価の向上 (H26 年度 12 月実績、全教員の「総合評価」3.10、同「満足度」3.05)</p> <p>イ 自己診断「教え方に工夫をしている先生が多い」の肯定率を 65%以上に (H26 年度は約 59%)</p>	<p>ア 第 1 回アンケート (6 月実施) では、全 9 項目すべてで前年度実績を上回った (「総合評価」3.04→3.10、「満足度」2.98→3.05) が、第 2 回アンケート (12 月実施) では、第 1 回の評価を伸ばすことができず、前年度実績ともほぼ同じ結果 (「総合評価」は 3.10→3.11、「満足度」は 3.05 で同値) となり、一層の改善が必要。(△)</p> <p>イ ICT機器の活用やペアワーク・グループワークに取り組む教員が増えたこともあり、「教え方に工夫…」の肯定率は 68%となった。(○)</p>
	(2) 夢と志を持った生徒の育成、進路保障体制のさらなる充実	<p>ア 適切な時期を見定めて、「転換期指導」を充実。(「入学当初の中学生から高校生への転換」、「受験生への転換」等)</p> <p>イ 家庭学習を含め、今後における学習指導のあり方について、アクティブラーニング等に関する研究チームを立ち上げ、取組みを開始。</p> <p>ウ 「生徒支援委員会」の組織機能を強化するなど、個別の課題等を抱える生徒の支援体制を一層充実。</p> <p>エ 校内模試を活用した学習指導、進路指導の充実と改善を図り、特に節目となる時期の模試については、より多くの生徒の受験を促す。また、各担任の進学指導スキルの一層の向上を図るための研修等を実施。</p> <p>オ 社会で活躍する卒業生や外部講師を活用するなどして、キャリア教育・人権教育に係る取組みを一層充実させていくことにより、多面的なもの見方や共感力をはぐくむ。</p>	<p>ア・イ 「学力生活実態調査」における生徒の家庭学習時間を 1.5 倍に (H26 年度 1・2 年平均平日 40 分、休日 60 分)</p> <p>ウ 自己診断「悩みや相談に応じてくれる先生がいる」の肯定率を 70%以上に。(平成 26 年度約 60%)</p> <p>エ 進学実績向上 (現役生、国公立大学 3 名以上かつ関関同立 80 名以上の合格) (H26 年度 3 名、65 名)</p> <p>学力生活実態調査において、B1 ゾーン以上の生徒を 1・2 年生とも昨年度の 1.1 倍以上とする。</p> <p>オ 自己診断「将来の進路や生き方について学ぶ機会がある、人権について学ぶ機会がある」の肯定率の向上 (H26 年度、85%、80%)</p>	<p>ア・イ 本年度は平日 38 分、休日 55 分となり、前年度以下となった。次年度の最重要課題とする。(△)</p> <p>また、アクティブラーニング等、今後の学習指導のあり方に関する研究については、校内研修等を複数回実施、多数の教員が参加した。</p> <p>ウ 「悩みや相談に…」の肯定率はわずかに増加し 63%となったが、目標に達していない。次年度以降も継続して取り組む。(△)</p> <p>エ 国公立大学については 4 人と増加したが、関関同立については 63 人にとどまり、目標に達していない。(△)</p> <p>B1 ゾーン以上の生徒数については、1 年生が 126 人で昨年比 1.02 倍、2 年生は 33 人で同 0.8 倍となり、目標に達していない。次年度は、特に 2 学年進級後の落ち込み防止を明確な目標とし、家庭学習のあり方も含め、指導の改善を図っていく。(△)</p> <p>オ 「将来の進路や生き方について学ぶ機会」については 89%に、「人権について学ぶ機会」については 82%に、それぞれ向上した。次年度は、より体系的に取り組むため、総合的な学習の時間の抜本的な改善に着手する。(○)</p>

府立枚方高等学校

2 「活気がみなぎり、かつ規律ある学校」の実現	(1) 学校行事の充実、部活動の活性化	ア 学校行事及びクラブ活動・生徒会活動を活性化する取組みを推進し、生徒のセルフ・エスティームの高揚を図る。 ・ トレーニング室やセミナーハウスの一層の活用に向けて、必要な備品等を整備 ・ 文化祭・体育祭をさらに生徒主体の行事とするため、企画から運営まで、可能な限り部活動生徒等に担当させる ・ リーダー講習会の充実 ・ あいさつ運動、エコ運動、ユネスコ・スクールとしての取組み等について、生徒会と関係クラブ等が連携できる体制を構築	ア 部活動加入率を3ポイント以上増(H26年度5月75%) 自己診断「文化祭・体育祭・修学旅行は、意義深いものになるよう工夫されている」の肯定率90%以上維持(H26年度約90%)	ア 部活動加入率は75%で変わらず。入学直後の指導を充実させていく。(△) 「文化祭・体育祭・修学旅行…」は、89%と高い評価を維持しつつも1ポイント減となり、目標には達していない。(△)
	(2) 生活規律を確立させる取組み	ア 生活規律を重視する指導を明確化し、生徒・保護者の一層の理解を得る。 ・ 遅刻指導のさらなる強化 ・ 服装指導、頭髪指導の継続 ・ 交通安全指導の充実	ア 年間総遅刻者数1,000人未満に(H26年度1,151人)。 自己診断「指導は適切か」の肯定率の向上	ア 今年度も多くの教員で、日々の登校指導に取り組んだこと等により、年間総遅刻者数については目標を大きく上回り863人となった。(◎) 自己診断(生徒)「先生の指導には納得できる」については71%で昨年度と同値(△)、自己診断(保護者)「生徒指導の方針に共感」は91%で昨年度(87%)から4ポイント向上。(○)
3 「グローバルに考え、行動する学校」の実現	(1) 「使える英語力」の伸長	ア 英検やTOEIC等受験に向けた対策講習を実施するなど、「使える英語力」向上のための研究(指導法の改善、ICT機器の活用等)を進める。 イ これまで培った国際教養科のノウハウを普通科にも応用し、学校全体の語学力向上をめざす。	ア・イ 英検等(TOEIC、TOEFL)の合格者数の増加(H26年度卒業生の在籍期間における2級合格17名、準2級合格65名) 各種英語(含多言語)スピーチコンテスト等の参加者数、入賞者数増。	ア・イ H27年度卒業生については、継続的に講習に取り組んだ成果等により、2級合格20名、準2級合格83名となった。(○) 府立高校国際関係学科設置校による「インターナショナルフェスティバル2016」に3名(内1名はタイからの留学生)が参加。
	(2) ユネスコ・スクールとしての取組みの充実・国際交流活動の活性化、	ア ユネスコ・スクールとしての活動を充実させ、適切に情報発信していくことで、取組みを「見える化」。 イ 海外修学旅行及び海外語学研修のさらなる充実、姉妹校との交流の推進。 ウ 異文化理解の推進に向けて、外部講師等を活用した講演やゲストティーチャーによる授業等を各学年で実施。	ア 具体の取組みを新規に企画・実施。 イ 事後のアンケート結果の分析。 ア～ウ 自己診断「国際交流活動が活発」の肯定率の向上(平成26年度83%)	ア 大学留学生との交流を推進(本年度2回実施)。校内で育てた楮(こうぞ)を使った和紙の手すき体験等、文化交流の機会を設けた。(○) イ シンガポールで実施した修学旅行については、事後のアンケートで、98%の生徒が意義ある機会となったと回答。オーストラリア語学研修(19人が参加)の成果については、本年度も参加生徒のレポートを「海外滞在研修報告書」として取りまとめたが、全員が有意義な機会になったと評価。 また、今年度、新たにオーストラリアの高校と連携協定(オーストラリアは計2校に)を結ぶとともに、次年度4月にはアメリカの高校から訪問を受ける予定で調整を進めている。(○) ア～ウ 「国際交流活動が活発」については90%となり、目標を達成した。(◎)
4 教員組織体制強化と環境整備	(1) 広報活動の一層の充実	ア 広報に関する業務を分掌機能の中に明確に位置づけることで、学校トータルとしての広報機能を充実。 イ 学校案内の全面改訂及び中学校等が主催する進学説明会への積極的参加を推進。	ア・イ 志願者の確保(H27選抜の志願倍率、国際教養科1.63倍、普通科1.34倍) 学校説明会の参加者数を1割増(平成26年度は約1,200人)	ア・イ H28年度選抜については、志願倍率が1.24倍となり、志願者は確保できた。(○) 学校説明会については、今年度も事前予約等の手続きなしで希望者全員を受け入れる形で実施した。2日間で計1,400人が来校、目標を大きく上回った。(◎)
	(2) 教育環境のさらなる改善・充実	ア ICT機器の活用に関する校内研修の実施。 イ 校内イントラネットの活用を促進するなどして、ペーパーレス環境を一層推進。	ア 各学期1回以上、校内研修を実施。 イ スクールドライブの活用率の向上	ア 短焦点プロジェクター等を設置したモデル教室を2室整備、6月に使用方法に関する説明会を実施するとともに、2度の授業公開週間(9/24～30、10/29～11/11)において、ICT機器活用PTメンバー等による研究授業を複数回実施。多数の教員が参加。(◎) イ 分掌業務等で、スクールドライブの活用がほぼ定着。加えて、学校ポータルサイトに設置した「掲示板」の併用も進み、職員意識は大きく改善した。一方で、各授業においてプリント教材等の工夫が進んだことにより、紙の消費量全体には、依然として課題がある。(○)